

『だめじゃ、ないだろう……？ほら、聴いてみなよ、これが君の、淫らな可愛いおまんこの音だよ……』

「……ツツ、！！?!、」

突如両耳のイヤホンから、ぬちゅっ♡ぐちゅっ♡♡という、卑猥すぎる水音が聞こえます。しかもそれは、股下で上下する鉄の棒とタイミングを同じくしていた。何も考えなくとも、これが自分自身のなかの音だとわからされる。

『どうだい？とってもいやらしくて、いい音だねえ……？』

「あああ” あ……っつ、♡♡♡♡♡♡」

下腹の奥を同じ速さで攪拌される淫楽と、両耳から流れる卑猥な水音、低い男の声とで、頭がおかしくなりそうだ。

高性能なイヤホンは立体音響で、すぐそばで男に囁かれているかのようだ。

孔のなかのぬかるみの音も繊細すぎるほどに鼓膜を打ち、彼の声と水音とに脳内まで犯されていく。

『ああ……君は今も、昔と変わらず可愛いね……。今日は僕のことを思い出してくれて、約束も思い出してくれた……。僕らにとって、最高の記念日だね……』

「ああ”っ…………、♡♡♡♡」

しとどに濡れた金属の棒がずりりと入り口にまで引き戻ったかと思うと、

「！？あ”ッ♡♡あ”あッ♡♡♡♡」

これまでとは比べようのない速さで、隘路を行き来しはじめた。

ぐちゅッ♡♡ぐちゅッ♡♡という音に鼓膜を^{なぶ}刺られながら、大きくなった抜き差しに孔内を^{いじ}苛めぬかれる。

「ひあ”ッ♡♡♡あ”ああッ♡♡♡♡っだめ…っあ”ッ♡♡♡あ”ああッ♡♡♡♡」

息もつかせぬ勢いで、入り口付近と最奥とを行き来される。

『君のなか…………こんなにきゅうきゅう締め付けてきて…………やっぱり君も、僕とずっとこうしたかったんだね…………？』

「あああッ♡♡♡ん”ッ♡♡お”ッ♡♡あ”あッ♡♡♡♡あああッ♡♡おっ♡♡おっ♡♡♡おっ♡♡、」